

無意志自動詞の可能表現に関わる要因の分析

—意志性・主体性・事態の性質を中心に—

呂 雷寧

キーワード 自己制御性、意志性、有情物・非情物、主体性、望ましい事態

1. はじめに

これまで多くの研究者が、無意志動詞には可能表現^①がないと主張してきた。例えば、寺村（1982：262–263）は「可能態をとることのできる動詞」は「意志的な動作を表すもの（〔+意志〕）でなければならない」とし、「〔-意志〕の動詞、～シヨウ、～シロという形のとれないもの」は「可能態をとることができない」と述べている。しかしながら、このような見解は妥当性に欠けていると思われる。次の(1)における「育つ」のように、無意志自動詞は可能表現に用いられることがある。

- (1) 娘が無事に卒園することができ、そして、ここまでのびのびと大きく育つことができたのは香嵐溪の大自然のおかげかもしれない。（作例）

無意志自動詞はいかなる条件の下で、「(ら)れる」あるいは「ことができる」^②を用いて可能を表すことができるのか。このことを、本稿では、意志性・主体性・事態の性質と結び付けて論じることとする。

2. 先行研究とその問題点

無意志自動詞の可能表現に関する研究に、青木（1997）がある。青木は、可能の表現形式には主体^③の意志性が大きく関わっていて、主体が非情物^④の場合には自動詞に可能の表現形式をあてることができないとしている。そして青木は、主体が有情物である場合、自動詞の可能表現は次の3つの特徴を有しているとしている。

- ①主体の意志が動作の結果までをコントロールできる場合、自動詞は「(ら)

れる」と「ことができる」の両方を用いることができる。このような特徴は(2)のような動作性のある動詞だけではなく、(3)のような心理的狀態を表す自動詞にも見られる（下記の(2)～(5)はいずれも青木からの引用で、下線は引用者による）。

- (2) a 太郎はどんなに高い所へでも怖がらずに上がれる。
 b 太郎はどんなに高い所へでも怖がらずに上がることができる。
- (3) a 試合の前はひどく緊張していたが、練習の時と同じようにやればいいのだと思っただんた落ち着けた。
 b 試合の前はひどく緊張していたが、練習の時と同じようにやればいいのだと思っただんた落ち着くことができた。

②主体の意志が動作のみをコントロールする場合、自動詞は「(ら)れる」と共起できず、「ことができる」を用いて可能を表すことができる。

- (4) a *太郎は懸賞付のクイズに何度も応募して、やっと二等賞に当たれた。
 b 太郎は懸賞付のクイズに何度も応募して、やっと二等賞に当たることができた。

③主体の意志性が表出されない場合、他者あるいは話し手の働きかけや期待が示されることによって、自動詞は「ことができる」を用いることができる。

- (5) a *太郎は川で溺れてしばらくは意識不明だったが、応急手当がよかったため助かれた。
 b 太郎は川で溺れてしばらくは意識不明だったが、応急手当がよかったため助かることができた。

青木（1997）には、次の2つの問題点がある。

第一の問題は、主体が非情物である場合、無意志自動詞を可能形にできないという主張である。次の(6)は、青木の理論では説明できない。

- (6) 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲くことができる。 (www.nhk.or.jp/sawayaka/ishigaki.html)

第二の問題は、無意志自動詞が「(ら)れる」、「ことができる」と共起できる

か否かに関わる条件についての説明が妥当性に欠けていることである。

まず、上記の③における「落ち着く」は、②における「上がる」と同様に、結果までコントロールできる意志自動詞とは考えられない。それゆえ①の説明は、「(ら)れる」と「ことができる」の両方と共起できる理由として妥当ではない。「落ち着く」は、主体の意志が結果までではなく、その心理現象に至るまでの努力しか制御できない無意志動詞であり、青木が言う特徴②を有すると考えられる。しかし、「落ち着く」が「(ら)れる」とも共起できるという点は、特徴②に反している。

次に、青木が言う③の特徴も妥当でないことを指摘しておきたい。下記の(7)と(8)のいずれにおいても主体の意志性が表出されておらず、また、事態の成立に話し手の期待が示されている。しかし、(7)における「捕まる」が「(ら)れる」と「ことができる」のいずれとも共起できないのに対して、(8)における「太る」はいずれとも共起できる。

- (7) a * 女兒殺害からすでに一年も経った。周りの人々の悲しみは今も癒されていない。果たして、犯人は捕まれるだろうか。
 b * 女兒殺害からすでに一年も経った。周りの人々の悲しみは今も癒されていない。果たして、犯人は捕まることができるだろうか。
- (8) a ……最後にみんなで記念写真を撮ったときに抱き上げた女の子の軽さに驚きました。保育園ができて村の暮らし向きも良くなれば、この子達ももう少し太れるかな、とも思いました。
 b ……最後にみんなで記念写真を撮ったときに抱き上げた女の子の軽さに驚きました。保育園ができて村の暮らし向きも良くなれば、この子達ももう少し太ることができるかな、とも思いました。

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/nyumon/episode/g_report/report_8.html)

以下、無意志自動詞と「(ら)れる」、「ことができる」との共起制限に、動詞の意志性、主体性、事態の性質が関わっていることを指摘する。

3. 動詞の意志性

3. 1 動詞における意志性の段階性

仁田 (1991) は、意志性を自己制御性 (self-controllability) と称し、「動きの

主体が、動きの発生・遂行・達成を自分の意志でもって制御することができる、といった性質である」(p243)と定義している。そして、動詞の示す自己制御性はあるか無いかといったものではなく、度合い・程度が存するとしうえで、動詞を次の3つのタイプに分けている。

①非自己制御性を持つ動詞：

動きの主体が、動きの発生・過程・達成をまったく自分の意志でもって制御できない。

例：呆れる、飽きる、慌てる、困る、佇む

②過程の自己制御性を持つ動詞：

動きの成立そのもの・動きの達成は自分の意志でもって制御できないが、動きの成立・達成に至るまでの過程、動き達成への企ては自分の意志でもって制御できる。

例：落ち着く、勝つ、合格する、しっかりする、思い出す

③達成の自己制御性を持つ動詞：

動きの主体が、動きの発生・過程だけでなく、動きの成立そのもの・動きの達成をも自分の意志でもって制御できる。

例：行く、食べる、殴る、読む、書く

本稿では、仁田のこの分類を援用して、達成の自己制御性を持たない自動詞、つまり非自己制御性を持つ自動詞と過程の自己制御性を持つ自動詞を無意志自動詞と見なす。

このように、無意志自動詞といっても、まったく意志性がないとは一律に言えず、その意志性には程度がある。そして仁田(1991:245)の指摘しているように、非自己制御性と過程の自己制御性の区別は必ずしも絶対ではない。同じ無意志自動詞であっても、コンテキストによっては、非自己制御性を持つ無意志自動詞になる場合もあれば、過程の自己制御性を持つ無意志自動詞になる場合もある。例えば、「似る」という無意志自動詞について言うと、下の(9a)における「似る」は人の先天的な特性を叙述したものである。そのような特性は、主体(彼)の意志で制御することができない。この場合の「似る」は、非自己制御性を持つ無意志自動詞であると言える。一方、(9b)における後天的な特性を叙述した「似る」は、主体(彼)の意志で「似る」という結果の達成に至るまでの過程を制御できるので、過程の自己制御性を持つ無意志自動詞であると考えられる。

(9) a 彼は顔が父親に似ている。

b 彼は父親を目標にして、いろいろと努力した結果、忍耐強い性格まで

父親に似るようになった。

(作例)

このように、無意志自動詞が自己制御性を持つか否かはコンテキストによって異なる。

3. 2 動詞の意志性による制約

無意志自動詞が可能表現に用いられるか否かはその意志性に深く関わっている。意志性の度合いが高ければ高いほど、無意志自動詞は可能表現に用いられやすい。

まず、非自己制御性を持つ無意志自動詞について見てみよう。

(10) a *この病人は手術で助かれる。

b ? この病人は手術で助かることができる。

上記の(10)における「助かる」は非自己制御性を持つ動詞で、意志性がまったくないため、可能表現になりにくい。しかし、次の(11b)においては、「ことができる」と共起して可能を表すことができるようになる。

(11) a *人間が地震に対して無力だとあきらめることはない。前もって適切な対策をとれば助かれるだろう。

b 人間が地震に対して無力だとあきらめることはない。前もって適切な対策をとれば助かることができるだろう。(作例)

(11b)が可能表現として適格なのは、(11)における「助かる」が過程の自己制御性を持つ動詞だからであると考えられる。この文では、主体(人間)は事態の結果までを制御できないが、前もって対策をとるなどすれば、「助かる」という結果に至るまでの過程を制御することができる。一般的に非自己制御性を持つ動詞として使われる動詞であっても、意志性が表出されるような文脈においては、可能表現に用いられるようになる。

一方、例えば「混ざる」という動詞は、いかなるコンテキストに置かれても可能表現になりにくい。なぜなら、「混ざる」はつねに非自己制御性を持つ動詞で、意志性が極度に低いからである。

(12) a *水と油は混ざれない。

b *水と油は混ざることができない。

次に、過程の自己制御性を持つ無意志自動詞を見てみよう。

- (13) a *あの人に会うと落ち着ける。
 b ?あの人に会うと落ち着くことができる。

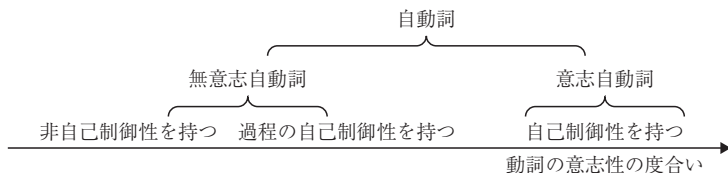
一般的に、過程の自己制御性を持つ動詞として使われる「落ち着く」は、(13)のような平叙する文においては、意志性が表出していないため、可能表現として成り立ちにくい。しかし、「落ち着く」の意志性が表出するように、コンテキストを下の(14)に変えれば、「(ら)れる」、「ことができる」のいずれとも共起して可能を表すことができるようになる。

- (14) a 試験の前はひどく緊張していたが、練習の時と同じようにやればいいのだと思ったらなんとか落ち着けた。
 b 試験の前はひどく緊張していたが、練習の時と同じようにやればいいのだと思ったらなんとか落ち着くことができた。

((3)を再掲)

(14)では、「落ち着く」という結果になるための過程に対する叙述に重点が置かれている。それにより、主体の制御性が表面化し、「落ち着く」の意志性が強くなるので、(14)が可能表現として成り立つのである。

このように、無意志自動詞は意志性の度合いが高くなるにつれ、可能表現に用いられやすくなる。意志性の度合い、つまり事態に対する主体の制御性の度合いは、下の図Ⅰに示すように、軸の右に行けば行くほど高くなる。無意志自動詞は、意志性の度合いが高くなるにつれ、意志自動詞に近付き、「(ら)れる」と共起しやすくなる。主体が事態の結果まで制御できるほど意志性が高くなると、動詞は意志自動詞になり、一般的に可能表現に用いられるようになる。



図Ⅰ 動詞の意志性の度合いによる自動詞の分布

4. 主体性

事態の成立にはさまざまな条件が必要である。動作・状態の担い手である主体から見れば、これらの条件はおおむね、主体の内部にある内的条件と、主体の外部にある外的条件とに分けられる。本稿では、主体の内的条件と、事態の成立を促す主体の積極性とを合わせて主体性と称する。主体性は無意志自動詞の可能表現に関わる重要な要因の1つである。すなわち、主体性は段階的なものであり、⁽⁵⁾その度合いが高くなるにつれ、無意志自動詞の可能表現の容認度が高くなる。

主体が有情物である場合、事態の成立に関与する主体の積極性は主に主体の意志性である。一般的には、有情物は意志性を持ち、事態の成立に関与する積極性が強いいため、その主体性は非情物におけるよりも強い。これが有情物は一般的に非情物よりも可能表現に用いられやすい理由の1つであると考えられる。しかし、事態に関与する主体性は事態の特徴にも関わり、主体が有情物であっても、意志性が必ずしも表出するとは限らない。また、たとえ意志性が表出する場合であっても、積極的に事態の成立を促さない場合もある。例えば、次の(15)においては、主体の意志性が明らかに表出しているが、その意志性が積極的に関与しているのは「転ぶ」という事態の成立ではなく、その非成立である。

- (15) しっかりと手すりを掴んでいるから、急停車されても絶対転ぶことはない。
(作例)

したがって、主体性の度合いは、主体が有情物であるかどうかでは一概に決まらず、具体的な事態を表すコンテキスト中で考えるしかない。

以下では、主体が有情物である場合と非情物である場合に分けて、可能表現の可否に主体性が関与していることを指摘する。

4.1 有情物の場合

主体が有情物である場合、主体の意志性が表出でき、そして主体が積極的に事態の成立を促すコンテキストでは、主体性がより強いので、無意志自動詞は可能の形式と共起しやすい。

まず、内的事態⁽⁶⁾を表す(16)と(17)を比較してみよう。

- (16) a *彼女は間食ばかりしているので、きっと太れる。

b *彼女は間食ばかりしているので、きつと太ることができる。

(17) a ? がりがりの彼女は最近きちんと栄養を摂るようにしているので、きつと太れる。

b がりがりの彼女は最近きちんと栄養を摂るようにしているので、きつと太ることができる。(作例)

(16)と(17)はいずれも主体(彼女)の生理的現象「太る」という内的事態を表しているため、事態に関わる主体の内的条件が同じであると考えられる。したがって、主体が事態にどれほど積極的に関与するのかによっては、主体性の度合いが異なってくる。(16)と(17)における主体性の差異はつまり、「太る」という事態の成立に積極的に関与する主体(彼女)の意志性の差異である。(16)においては、主体(彼女)の意志性が「間食ばかりする」という行為に表出している。しかし、「彼女」が「太る」ために「間食ばかりする」とは考えにくいので、「太る」という事態の成立に「彼女」の意志性がまったく積極的に関わっておらず、(16)における主体性が「彼女」の内的条件のみで極めて弱い。そのため、(16)は可能表現として不適格である。これに対して(17)においては、「彼女」は「太る」という事態を積極的に成立させようとして、「きちんと栄養を摂る」ということを意図的に行っているので、その主体性の度合いは(16)におけるよりも、かなり高いと見なされる。(17b)が可能表現として成り立つのはそのためである。

外的事態を表す無意志自動詞も、内的事態を表すのと同様に、事態に関与する主体の積極性が強いほど、可能表現に用いられやすい。

(18) a *雨の日には牛が濡れられるから、早く壊れた屋根を修理したほうがいい。

b *雨の日には牛が濡れることができるから、早く壊れた屋根を修理したほうがいい。

(19) a ? 屋根は半分開いており、写真のように雨に打たれたればこうして自由に濡れられる。牛をあくまで自然の状態に近づけた飼い方が行われている。

b 屋根は半分開いており、写真のように雨に打たれたればこうして自由に濡れることができる。牛をあくまで自然の状態に近づけた飼い方が行われている。(http://www.pref.akita.jp/fpd/gamy/doitu5.htm)

(18)と(19)はいずれも主体(牛)の「濡れる」という外的事態を表している。同じ無意志自動詞「濡れる」が(18)では可能表現にならないが、(19b)では「こと

ができる」と共起できるのはなぜであろう。それは、(19)における主体性の度合いが(18)におけるよりも高いからであると考えられる。(18)では、「濡れる」という事態は主体(牛)の望んでいる事態とは捉えにくい。その成立に対する主体(牛)のいかなる積極性も示されていないからである。これに対して(19)では、「雨に打たれたければ」、「自由に」といった語句から、主体(牛)は「濡れる」という事態に積極的に関与している意味が読み取れる。

一方、事態に関与する主体の積極性の度合いが同等である場合、内的事態における主体性が外的事態におけるよりも強いので、内的事態を表す無意志自動詞は外的事態を表すそれよりも可能表現に用いられやすい。

(20) a *娘が無事に卒園することができ、そして、ここまでのびのびと大きく育てたのは香嵐溪の大自然のおかげかもしれない。

b 娘が無事に卒園することができ、そして、ここまでのびのびと大きく育つことができたのは香嵐溪の大自然のおかげかもしれない。

((1)を再掲)

(21) a *女兒殺害からすでに一年も経った。周りの人々の悲しみは今も癒されていない。果たして、犯人は捕まれるだろうか。

b *女兒殺害からすでに一年も経った。周りの人々の悲しみは今も癒されていない。果たして、犯人は捕まることができるだろうか。

((7)を再掲)

上記の(20)と(21)はいずれも主体の意志性が表出していない。両者の違いは、(20)が主体(娘)の「育つ」という内的事態を表しているのに対して、(21)は主体(犯人)の「捕まる」という外的事態を表している。「育つ」という内的事態には、主体(娘)の内的条件が欠くことのできない重要な要因である。それに対して、「捕まる」という事態に重要なのは、主体(犯人)の内的条件ではなく、警察などの努力といった外的条件である。なぜなら、主体(犯人)は「捕まらない」ようにするのが普通だからである。このように(20)は、事態に関与する主体の内的条件の度合いが(21)より高いため、その主体性も(21)より強い。したがって、(20)における「育つ」は(21)における「捕まる」よりも可能表現になりやすい。

4. 2 非情物の場合

非情物は、生物⁽⁷⁾と生物以外の非情物に分けることができる。生物は生命があるため、他の非情物にないある特有の「力」を有していると思われる。そのため、他の非情物の主体性が事態の成立に関わる内的条件のみであるのとは異

なり、生物に生物らしさが現れている場合には、その主体性は内的条件以外に、事態の成立を促す主体の積極性、つまり生物のこの特有の「力」をも含んでいる。したがって、生物は一般的に他の非情物よりも主体性が強く、可能表現に用いられやすい。

次の「増える」を用いた例文を見てみよう。

- ② a * お金は銀行に預けておけば、安全だけでなく、利息も増えられる。
 b * お金は銀行に預けておけば、安全だけでなく、利息も増えることができる。
- ③ a ? ウイルス粒子は普通の細菌よりずっと小さく、電子顕微鏡でなければ観察できないほど小さな粒子です。ウイルス粒子だけでは増えられず、人間の生きた細胞の中でのみ増えられるのです。
 b ウイルス粒子は普通の細菌よりずっと小さく、電子顕微鏡でなければ観察できないほど小さな粒子です。ウイルス粒子だけでは増えることができず、人間の生きた細胞の中でのみ増えることができるのです。

(<http://www.pref.osaka.jp/shokuhin/noro/>)

上記の②と③はいずれも「増える」という事態を表しているが、事態の本質が異なっている。②における「増える」という事態は主体（利息）の内的条件ではなく、預金の利率などといった外的条件に依存しているため、②における主体性は極めて弱いと考えられる。それに対して、③における「増える」という事態に関与する最も重要な要因は主体（ウイルス粒子）の内的条件である。内的条件が「ウイルス」に備わっていることが事態成立の前提であると考えられる。内的条件に適した外的条件さえ満たされれば、「ウイルス粒子」の生物らしさが表出し、積極的に「増える」という事態の成立を促す。そのため、③における主体性は主体「ウイルス粒子」の内的条件と「ウイルス粒子」の有する生物らしい「力」の総和であり、②における主体性よりも明らかに強い。ここにこそ、(23b)における「増える」が可能表現に使われる理由があると考えられる。次の(24b)についても同様なことが言える。

- ④ a * 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲ける。
 b 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲くことができる。 ((6)を再掲)

これと対照するために、次の例文を見てみよう。

- ②5 a *桜は一週間も経たないうちに散れる。
 b *桜は一週間も経たないうちに散ることができる。

②5は②4と同様に、生物「桜」の属性を表している。そして、その属性の成立に関わる要因は主に「桜」の内的条件にある。したがって、②5における「桜」の主体性の度合いは②4とほとんど変わらない。それにもかかわらず、②5が可能表現として不適格なのはなぜだろうか。これには、次節で論じる別の要因が関わっている。

5. 事態の性質

可能表現は「望ましい事態を表す傾向がある。望ましい事態とは、動作・状態の担い手の希望、あるいは話者などの期待が込められる事態のことである」(呂2006:60)。言い換えると、無意志自動詞は主体の希望、あるいは話者などの期待が込められたような望ましい事態を表す場合に、可能表現に用いられやすくなると考えられる。以下において、このことを確認する。

まず、主体の希望が込められた場合について見てみる。

- ②6 a *皆は船の揺れで空に飛ばされて落ちられた。
 b *皆は船の揺れで空に飛ばされて落ちることができた。
 ②7 a *私は生来至って短気で、思い通りにならないとすぐ怒れる。
 b *私は生来至って短気で、思い通りにならないとすぐ怒ることができる。

無意志自動詞「落ちる」と「怒る」は、社会通念に照らしてみれば、本来マイナスの意味を含み、⁽⁸⁾一般的に主体にとって悪い結果をもたらし、主体が当然避けようとする動作・状態を表す。したがって、②6、②7のような、マイナスの意味を表す普通のコンテキストにおいては、可能を表すことができない。しかし、②8、②9のようなコンテキストでは、可能表現としての適格性が増してくる。

- ②8 a *船は激しく揺れだした……(中略)……デッキにいた数人が、その揺れで空に突き飛ばされてしまうが、皆うまく船上に落ちられた。

- b 船は激しく揺れだした……（中略）……デッキにいた数人が、その揺れで空に突き飛ばされてしまうが、皆うまく船上に落ちることができた。
 (http://www.ifnet.or.jp/~kaji/bank99a/ybank297.html)
- (29) a ショックを受けた私は長い間何事にも無関心だった。最近はやっと心から笑えるようになり、本気で怒れるようになった。
- b ショックを受けた私は長い間何事にも無関心だった。最近はやっと心から笑うことができ、本気で怒ることができるようになった。

（作例）

上記の例文における「落ちる」、「怒る」はいずれも本来のマイナスの意味を失い、主体にとって望ましいことを表していると思われる。(28)における「うまく」という語句から、「船上に落ちる」という結果に「皆」の希望が込められていることが読み取れる。同様に、(29)においては、「やっと」という語句から、「本気で怒る」という心情の発生に「私」の希望が込められていることが分かる。このように、主体の希望が込められたような望ましいことを表す場合、無意志自動詞は可能表現に用いられやすくなる。

可能表現の表す事態の性質について、森田（1987：478－479）は「＜可能＞は＜希望＞の結論として存在し“……したい”→“……することができる”と意志的にとらえるところに特色がある」として、可能を主体の希望の実現であるとしている。森田のこの考えは上述したことの裏付けとなると言えよう。

次に、話者や他者などの期待が込められる場合について見てみる。無意志自動詞「太る」を用いた下記の(30)と(31)を比較してみよう。

- (30) a *そのうち、この子達は太れる。
 b ?そのうち、この子達は太ることができる。
- (31) a ……最後にみんなで記念写真を撮ったときに抱き上げた女の子の軽さに驚きました。保育園ができて村の暮らし向きも良くなれば、この子達ももう少し太れるかな、とも思いました。
- b ……最後にみんなで記念写真を撮ったときに抱き上げた女の子の軽さに驚きました。保育園ができて村の暮らし向きも良くなれば、この子達ももう少し太ることができるかな、とも思いました。

((8)を再掲)

無意志自動詞「太る」は時代や地域などによって、それに含まれるニュアンスが異なるため、本来プラスの意味を含むとも含まないとも一概に言えない。

したがって、③①のような普通のコンテキストにおいては、可能を表すことができない。それに対して③①は、「この子達」の「太る」ということの実現は話者から見れば望ましいことであり、そこに話者の期待が込められていることが読み取れるため、可能表現として成り立つと思われる。

非情物が主体である場合も同様に、望ましいことを表すコンテキストにおいては、無意志自動詞は可能表現に用いられやすい傾向がある。

下の③②、③③における無意志自動詞「輝く」、「実る」は、それぞれ「星」、「米」の属性を表している。これらの属性は、いずれもプラスの属性であると考えられる。また、同じ例文における「美しく」、「しっかりと」という副詞から、これらの属性の具現化が話者などに期待されているというニュアンスが読み取れる。したがって、これらの無意志自動詞は、「ことができる」という形式を用いて可能表現にすることができる。

③② a *……自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝ける
という訳です。

b ……自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝く
ことができるという訳です。

(<http://www.vill.hara.nagano.jp/pages/41/837/6476.html>)

③③ a *……イネの「いなほ」が出てから実るまでの間（おいしいお米をとる
のに一番大切な時期）に晴れている日が多いので、お米はしっかりと
実れます。

b ……イネの「いなほ」が出てから実るまでの間（おいしいお米をとる
のに一番大切な時期）に晴れている日が多いので、お米はしっかりと
実ることができます。 (http://agrin.jp/hp/q_and_a/shonai_heiya.htm)

一方、下の③④は可能表現として不適格である。それは「枯れる」というマイナスの意味、つまり望ましくない事態を表しているからである。

③④ a *秋になったら、木の葉は枯れられる。

b *秋になったら、木の葉は枯れることができる。

これと同じ考えは、上記の②④における「咲く」が「ことができる」と共起できるのに対して、②⑤における「散る」が可能表現にならないということにも当てはまる。

6. おわりに

以上、無意志自動詞の可能表現に関わる要因について考察を行った。その結果、動詞の意志性、主体性、事態の性質という3つの要因が、無意志自動詞が可能表現になるか否かに関わっていることが明らかとなった。

この3つの要因はいずれも無意志自動詞の可能表現に関わる重要な要因であるが、無意志自動詞が可能表現に用いられるか否かに対して、それら3つが同時に関与していることも少なくないのである。望ましいことを表すコンテキストにおいては、動詞の意志性と主体性の度合いが頂点に達すると、その動詞は主体の内的事態を表す意志動詞となり、「(ら)れる」と「ことができる」のいずれとも共起できるようになる。

これらの要因はそれぞれ単独で存在しているものではなく、互いに繋がっている関係にある。動詞の意志性は主体の意志性が出するコンテキストにおいてしか論じられない。また、動詞の意志性（つまり、事態の成立に対する主体の制御性）が強ければ、事態の成立を促す主体の積極性が強く、主体性も強いということになる。これはまた、事態の成立は主体にとって望ましいことを意味する。逆も同じことが言える。事態の成立が主体にとって望ましくないことである場合、主体は当然事態の成立を避けようと考えられるため、主体性も弱く、動詞の意志性の度合いも低い。

本稿の考察により、無意志自動詞は「(ら)れる」よりも「ことができる」とより共起しやすいということも分かったが、「(ら)れる」と「ことができる」との間にいかなる相違点があるのかについては今後の課題とする。

注

- (1) 本稿では、擬人化と捉えられる場合の可能表現を研究対象外とする。
- (2) 本稿では、①可能動詞（五段活用動詞の、-e-ru語尾をとる形）、②動詞の未然形＋可能の助動詞「れる／られる」、③サ変動詞の語幹＋「できる」、の3つの形式をまとめて「(ら)れる」と称する。そして、動詞の連体形＋「ことができる」という形式を「ことができる」と略称する。また、「得る」は「文章語的なニュアンスを持つ」（渋谷1986）ため、本稿では研究対象としない。
- (3) 本稿は青木に従い、動詞によって表される動作・状態の担い手を主体と称する。主体は多くの場合に、文の主語として表されるが、必ずしも動作主

とは限らない。

- (4) 宮島（1972：422）は、「＜有情物＞というのは、つまりほとんどは人間だが、動物も、感情や理性をもったものとしてあつかうばあいには、ここにはいる」と述べている。そして、藤井（1971）も、人またはその他の動物を有情物とする。本稿は宮島と藤井に従い、人間や動物を有情物とし、それ以外を非情物とする。青木では、非情物を無生と、有情物を有生と称している。
- (5) 主体性は段階的なものであると言う本稿の考えは森山（1988）と一致している。ただし、本稿で言う主体性は、主体が動詞の表す動きに対する自律的（つまり意志的）な関与（支配）であると言う森山の定義とは異なり、必ずしも主体の意志的な関与とは限らない。
- (6) 本稿は主体の生理的・心理的現象を内的事態と称し、それ以外の現象を外的事態と称する。
- (7) 本稿で言う生物は非情物における生物であるため、人間や動物といった有情物が含まれていない。
- (8) 宮島（1972：492）は、「ひろい意味で『評価』に関係のある動詞には、いろいろな種類がある」としている。「評価」に関係のある動詞を宮島に従って大まかに分類すれば、「いらっしゃる」「さしあげる」のように動作の主体や相手に対する敬意を表すもの、「なおる」「ゆがむ」のように変化の結果に対する評価を表すもの、「でっちあげる」「かおる」のように動作・状態自体に対する評価を表すものという3種類がある。本稿では、このように広い意味でよい評価を伴う動詞をプラスの意味を含む動詞と称し、悪い評価を伴う動詞をマイナスの意味を含む動詞と称する。そして評価を伴わない動詞と悪い評価を伴う動詞を合わせてプラスの意味を含まない動詞と称する。

参考文献

- 青木ひろみ（1997）「自動詞における《可能》の表現形式と意味—コントロールの概念と主体の意志性—」『日本語教育』93号pp.97－109 日本語教育学会
- 工藤まゆみ（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房
- 渋谷勝己（1986）「可能表現の発展・素描」『大阪大学日本学報』5 pp.101－

136

- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅰ巻』pp.255-270 くろしお出版
- 仁田義雄 (1988)「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』17-5 pp.34-37 大修館書店
- (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書店
- (2004)「意志性から見た主語」『月刊言語』33-2 pp.41-49 大修館書店
- 藤井 正 (1971)『日本文法大辞典』松村明編 明治書院
- 宮島達夫 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所 秀英出版
- 森田良行 (1987)『角川小辞典7 基礎日本語Ⅰ』角川書店
- 森山卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 呂 雷寧 (2005)『現代日本語における可能表現の研究』名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文
- (2006)「使用範囲から見た日中両言語の可能表現」『ことばの科学』第19号pp.53-66 名古屋大学言語文化研究会
- (2007)「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」『言葉と文化』第8号pp.187-200 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻

例文出典

検索エンジン (検索期間：2007年3月1日～7月31日)

Google (<http://www.google.co.jp/>)

Yahoo (<http://www.yahoo.co.jp/>)